

子供服洋装化の導入と改良服に求められた機能性との関係

—— 子供服の復元を通して ——

山田 民子*・寺田 恭子**・澤野 文香*・高橋紗也佳**・金子 真希**

Relation to Functionality Requested from Improvement Clothes and Introduction of
Children's wear Western Clothes Making
: through the Restoration of Children's Clothes

Tamiko YAMADA, Kyoko TERADA, Ayaka SAWANO, Sayaka TAKAHASHI, Maki KANEKO

1. はじめに

第1報は、渡邊辰五郎考案の改良服の復元を通して改良服についての研究を行った。渡邊辰五郎は、明治14年に和洋裁縫伝習所を創立された翌年には、「改良服を考案する会」を設立していたのであった。

設立した目的は、いかにして和服を機能化させるかという点にあり、実際に着用するための改良服考案に終始していた。西洋の服装を我が国の風俗に合わせ、その背景の中で機能性を与えながら、審美性を壊さないように衣服の改良を図ったのである。さらに、適当な教師を選出し、この縫製技術を教授することを目的とした。明治32年頃には、弘田医学博士から依頼された医師の改良服を考案し辰五郎が自ら実物を製作した。明治36年には、『婦人改良服裁縫指南』を記し、改良服の裁ち縫いを詳細に教授している。さらに学校教育において、改良服の実物製作に取り組んでいた。

明治期、日本も近代化に伴い従来の不合理な和服から、時代の流れに対応した新しい考案服を生み出そうとした運動が生まれた。これが衣服改良運動であったが、この衣服改良運動の推進者は、医者、および当時海外へいち早く留学した学識者であった。海外の衣服の情報を得た医者らは、医学的な立場から、子供の日々の成長に対応できる活動的な衣服の必要性を提唱していた。和服の弊害として1. 袖の長さ 2. 裾の重さ 3. 帯の幅が広くて重たいこと 4. 細紐の多いこと 5. 履物の重いこと 6. 髪飾りの重いこと 等を挙げ着用上の問題点を指摘していた。これらは、いずれも体の運動を妨げ、体の発育を障害するものであるとしていた¹⁾。

特に従来使用の日本服・男女服には、有害なものがあるとし、これらを改良するのは、当然のこととしている。体の運動を妨げるものの弊害は、学業まで影響すると考え、一刻も早く男女学生よ

* 服飾美術学科 服飾造形第2研究室 ** 服飾美術学科 服飾造形第1研究室

り始めることを進めていた。「1日遅ければ、1日の損になる」というくらいに、改良服の導入を早急に考えていた¹⁾。

渡邊辰五郎も改良服＝洋服という考えを根底に持っていたようであるが、着物の生活が長く、保守的な日本人に新しい考え方、改良服＝洋服の考え方を普及させることのむずかしさを感じていたようであった。

ドイツ人医師エルウィン・ベルツは、明治9年から26年間、東京大学医学部のお雇い教師であった。ベルツは、明治34年、公使館関係と日本上流社会の婦人達が組織していた会『月曜会』場所は、鍋島侯にて、婦女子の服装改革に関して講演を行い12歳までの子供には、単純に洋服を推進したようであった。しかし、大人の場合は、事情が簡単ではなかったようで『この講演の効果に期待をかけた』と日記に記されていた²⁾。明治17年には、鹿鳴館が落成し西欧風俗模倣と欧化主義の導入により上流夫人に洋装バサルススタイルのドレスが流行したが、洋装は一般庶民の婦人に受け入れられるまでは、時間がかかったようであった。洋装に対するイメージは、宮廷衣装の影響が強かったのではないかと考えられる。

しかし、子供の日々の成長に対応できる活動的な衣服の必要性を受け止めた、上流階級の大人が子供に洋装を取り入れたのが、子供服導入の始まりのように考えられた。服種は、晴れ着や、外出着で高級感のあるものである。

19世紀後半は、ヨーロッパにおいても、大人服の縮寸のような子供の衣装が問題となっていた。子供のライフスタイルに合った衣装が提案されていたのである。子供の水着に快活な機能性のあるものが、製作されたのが始まりであったようである。しかし、デザインにおいては、装飾の多い宮廷服の影響があるように感じた。

佐賀の徴古館、侯爵鍋島家伝来の品の中に、明治14年に作成された小袖の生地を用いてのバサルススタイルのドレスの衣装や仮想舞踏会で用いられた舞踏服、さらには、明治13年特権全権公使イタリア在勤を命じられた、11代鍋島直大が持参した大礼服で帽子、上着、ベスト、ズボン、肩章、剣釣からなる燕尾服があった。

大礼服は、明治5年に制定されて以来度々改訂され明治17年には、飾章まで細かく制定され、19年に文官の大礼服が確定されたのである。鍋島家の大礼服は、それ以前の原型といえる。

以上の鍋島家の洋装の取り入れ方や、鍋島家においてのベルツの講演内容²⁾から察すると子供服においても鍋島家は早い時期に導入されたのではないかと推測できる。徴古館、侯爵鍋島家伝来の子供の写真の中に、年代は不詳であったが大き目の衿のついた晴れ着・外出着を着用している子供の写真と、正礼装とも考えられる衣装に大き目の帽子をかぶり、靴を履いている写真を見かけた。普段着では、和服の上にエプロンをかけていた。正礼装とも思われる衣装は、明治13、14年に製作されている大礼服やバサルススタイルのドレスと同じ時期に製作されたものとも考えられる。

明治23年頃の鍋島直大一家の写真がホームページに掲載されているが、6人の子供全員が、着物を着用しているので、鍋島家に生活着である洋装が導入されたのは、その後と考えられる。

明治後半に授業の中で教材として製作された子供服の雛形が、東京家政大学の博物館に所蔵されている。もっとも古いものは、和服・洋服とも明治30年卒業者の製作物ですでに女児服・子供洋服・女海水浴着・ペティコート等があり、その中で子供洋服・ペティコートには、部分的ではあるがミシン縫いがみられる。明治38年以降になると雛形が全部ミシンで製作されているのが見られるようになる。子供服の用途の多くが生活用であることから、庶民の衣服生活を先見した教育を行っていたことがわかる³⁾。

辰五郎の長男滋は、明治33年24歳で米国に渡り裁縫学校で1年間学び、その後引き続きヨーロッパ諸国を歴訪し、洋服裁縫教育を視察して明治35年に帰国後、直ちに『新式洋服裁縫』の教授を始めた³⁾。近代的な女子の服装として、活動しやすい洋服の必要性を感じてのことであった。本学は、洋服の裁縫教育についても時代を先駆けした教育を行っていたと考えられる。

本報においての目的は、子供服の雛形を復元し、この復元を通して明治期から大正、昭和に至る子供服の作図の中に機能性がどのように考えられていたのかを検討した。主に原型について検討した。日本における子供服の変遷等について研究された論文は数多くみられるが、子供服の原型の変遷について研究された論文は、見当たらない。

さらに環境変化の大きい現代において、子供服を安心・安全面から追求し研究を行うことを目的とする。

2. 子供服の雛形の復元

子供洋服について、明治43年4月25日発行の渡邊裁縫講義高等部には、『和服においても洋服においても色の調和を考えなければならないが、洋服においては、特に注意する必要がある』と記載されており又、洋服の導入について『衛生上に大利益があることでしょう』と記載されていた⁴⁾。

本報においては、写真1、2に示す子供服の復元を行った⁵⁾。これらは、雛形製作であるが、写真1は、子供服にふさわしい小さな模様柄の柄生地を選んでおり、レースや、ブレードとのマッチング



写真1 女简单服（明治38年製作）



写真2 女简单服（明治41年製作）

も素晴らしい。写真2は、フリル、ギャザー、レース等を用いた装飾性のあるデザインで配色等を意識して製作されていることがわかる。又、子供の成長に合わせて丈を調整できるように工夫してある。縫い方の他に機能性や、ファッション性を取り入れた子供服を雛形製作を通して学んでいたことがわかった。

2種ともに2、3才用の女兒の生活着・簡単服である。日常の生活の中に子供服を導入しようと考えていた辰五郎の考え方を理解することができた。雛形の子供服は、多くが生活着・簡単服とされているが、19世紀後半のファッション誌に掲載されている子供服のデザインによく似ているものを感じた。図1にファッション画⁶⁾を示す。海外のデザインを取り入れていたことが分かった。



図1 米国ファッション誌における子供服のデザイン⁶⁾

復元に用いた生地は、ブロード、柄は、雛形のワンピースの柄をスキャンして色調整・柄サイズの調整を行い、生地にプリントアウトしたものを用いた。

採寸は、首回り、胸回り、身の丈、袖丈であり首回り、胸回りは、最も太いところを計り、袖丈は、子供の手を真直ぐに下げさせて、脇下より手首までを計るものであった。ただしこの寸法を計るには、その着用の際に用いるべき下着類を残らず着用させてその上をテープで引き締めずに計ると解説されていた⁴⁾。

縫製は、雛形もすべてミシン縫いで製作されていたので、同様の方法を用いた。

2種のワンピースとも前後身幅いっぱい、ピンタックやプリーツがとってあり、袖山にもたく

さんのギャザーが入っている。また裾には、成長に合わせて丈を調整できるように大きくプリーツをとって工夫してある。着心地の良さや動きやすさが必要とされる子供服には、機能性に優れた洋服が積極的に取り入れられた様子がよくわかった。

2-1 作図

作図は、写真1、2のワンピースそのものの作図を示したものがテキストには、見当たらなかったためテキストに掲載されている他のワンピースの作図と、雛形からパターンを起こした。参考にした作図を図2に示す⁷⁾。

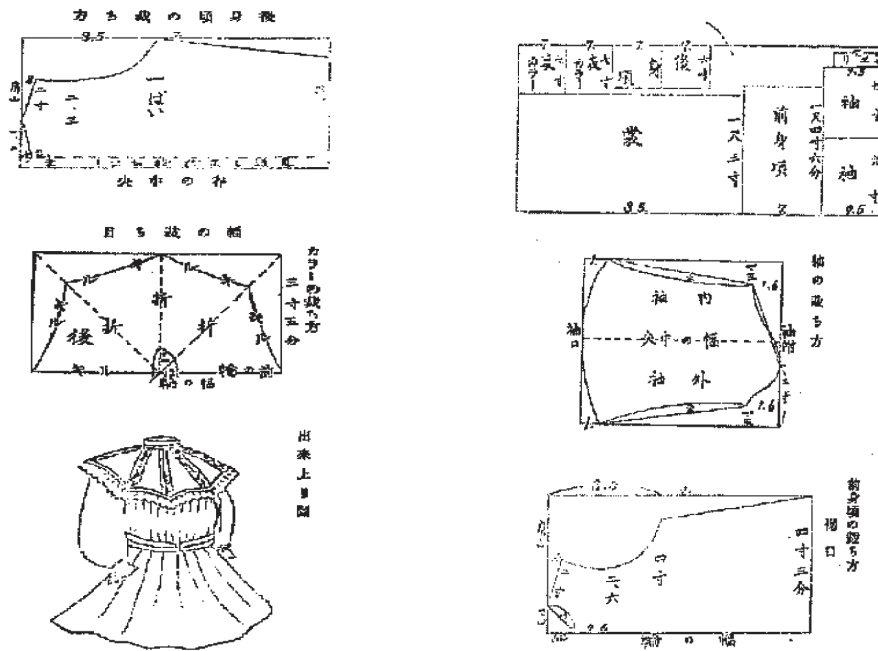


図2 2、3歳の小児用の簡単服の裁ち方

作図の方法は、型紙という考え方はなく生地直にのしをつけていく方法で、着物のしるし付けと同様である。寸法は、鯨尺が用いられており、しるしの付け方は、記号ではなく『自分の向こうで左より右に』という解説方法であり、プリーツを入れながらしるしをつけて行き完成させるというものであった。縫い代という考え方もなく、生地幅いっぱいに作図されていた。そのため縫い代は、身頃の作図の中に含まれている。

このしるし付けの手法は、図解を入れて、丈のしるしをつけると同時に、差支えのない限り幅印まで付けておくという方法で本職の仕立て屋さんの手法ではなく、辰五郎独自の方法であったようであった。背を縫ってから後ろ幅のしるしをつける、脇を縫ってから前幅のしるしをつける方法は、前の縞目を真直ぐ通すことができるとして、用いられていたようである。しかし学校における教育は、教材を数か月にわたって一つの教材を教える場合があり、教えるのに教えにくかったようであった。その後、学校流というものが出来上がったようである。

図2の解説においては、原型という表現をされたものはなかったが、ワンピースの作図の中に原型の考え方が入っているのが理解できた。生地上のしるしの付け方を図3に、原型を図4に示す。前後身頃の衿線り、A.H曲線は、着物にはない曲線で描かれていた。身頃の作図は、2枚ずつ必要になるため同じ方向で描かれており合理性を感じた。前身頃の肩線がアウトカーブで描かれていることや、A.H曲線の形状からメンズの作図の考え方が導入されていることがわかった。後身頃の肩幅線は、前身頃の肩幅線より0.5cm程長くとり後ろ肩甲骨に対するいせ込みが考えられていた。前下がりという考え方はなかったが、前身頃のA.H曲線が後ろ身頃より長いことで胸曲を処理しているようにも推測できた。

袖は、1枚袖で描かれていたが、袖下の縫い目が前袖の方にあり2枚袖の考え方で描かれたものと推測できた。身頃のA.H曲線と袖山曲線の関係についての『いせ込み』の考え方は見えなく身頃のA.H曲線の方が、長くなっていた。袖山にギャザーの入ったワンピースが多いため、ギャザー分を入れながら袖の作図を行うので、原型の袖山曲線の考え方は、重要視されていなかったのではないかと考えられた。袖丈は、脇下で求めることから袖下の長さは、忠実に同寸になっている。胸幅、背幅が極端に短くなっており、現在使用されているものと大きく異なることがわかった。

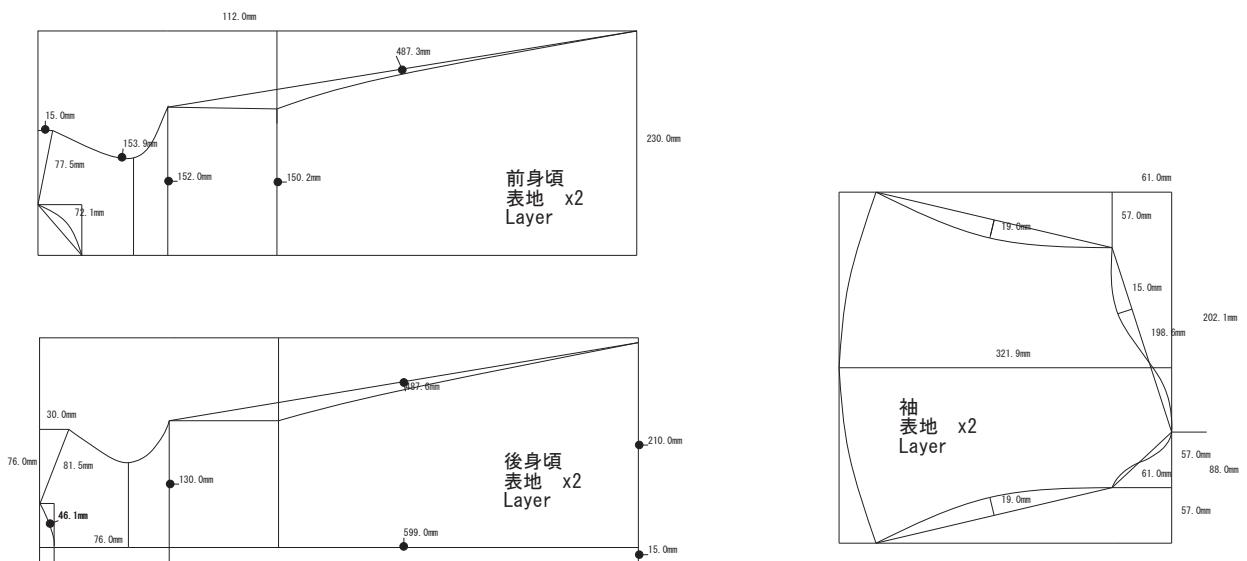


図3 しるしの付け方

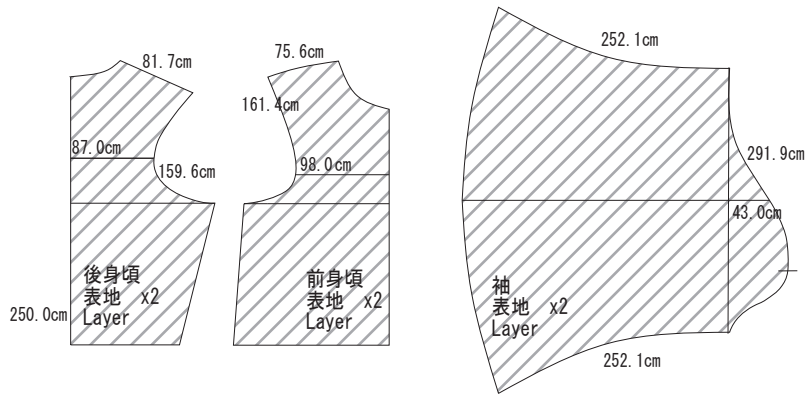


図4 原型

2-1-1 写真1の女児簡単服の作図 (図5)

図5の作図は、図3のしるし付けを基本として、雛形ワンピースのプリーツの入れ方を参考にパターンを作成した。袖においても同様にギャザーを入れパターンを作成した。

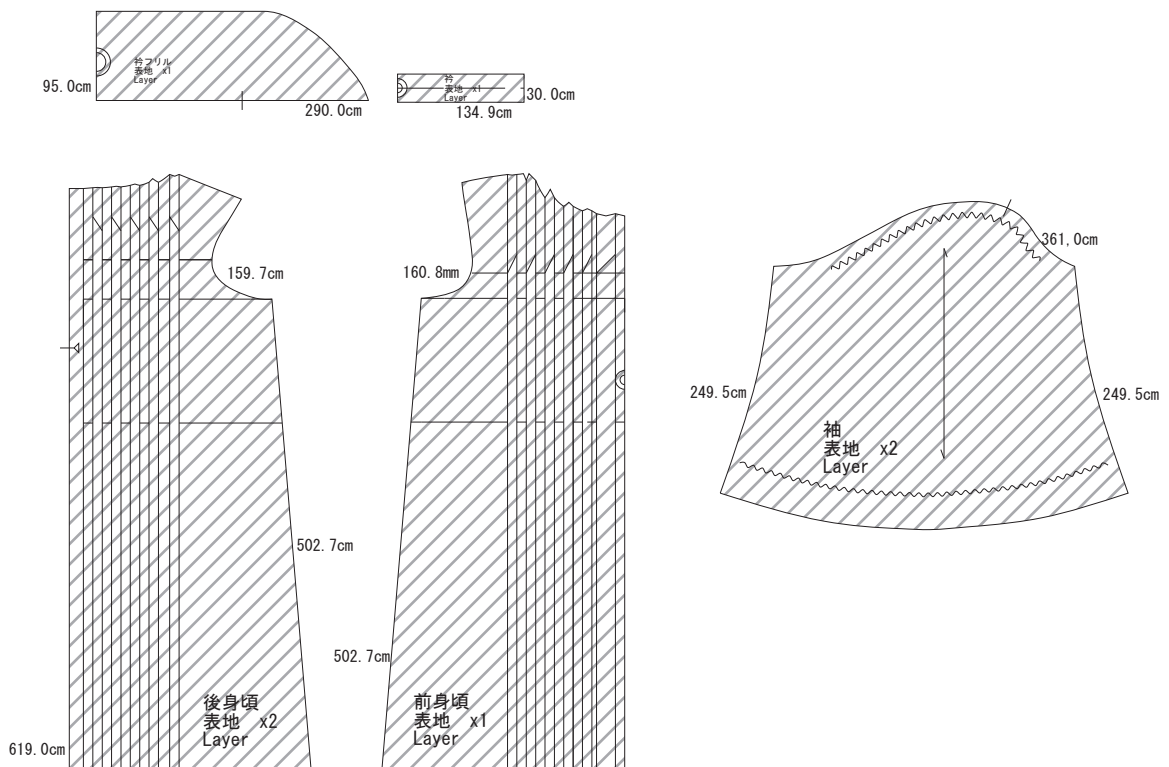


図5 写真1のワンピースの作図

2-1-2 写真2の女児簡単服の作図 (図6)

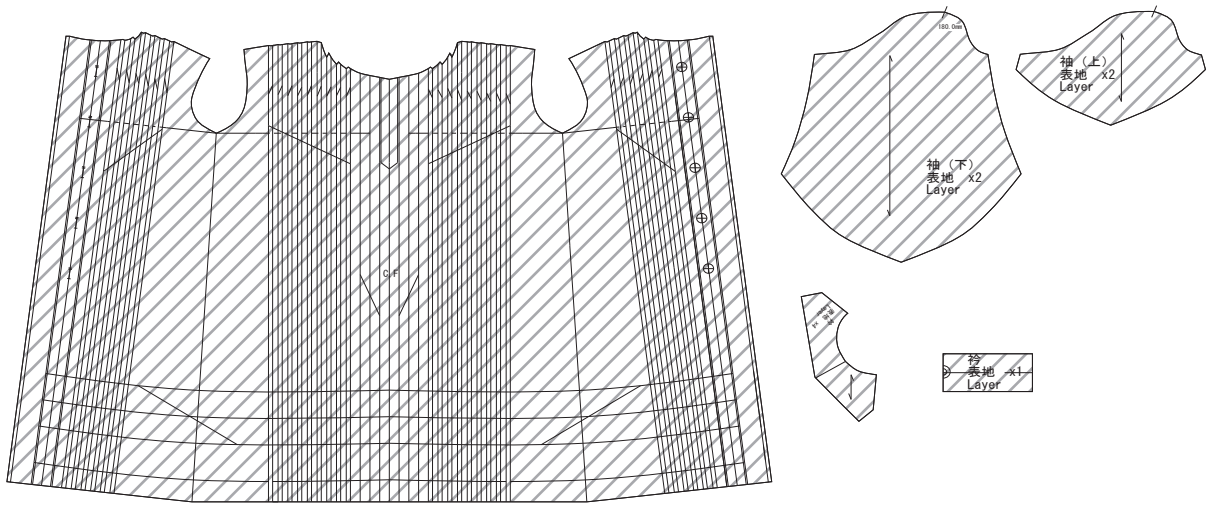


図6 写真2 のワンピースの作図

図6の作図は、脇の縫い目はなく前後続きのパターンになっており、前中心に縦の地の目を通して、作図の方法も、布幅を2等分し前中心のプリーツから折りはじめ、しるしをつけながら前身頃を完成させ、後ろにわたり前身頃と同じようにしるしをつけたものと考えられた。

2-2 復元写真

2-2-1 写真1の雛形子供服の復元



写真1-1 前面

写真1-2 後面

写真1-3 脇面



写真1-4 肩と袖つけの縫い代の始末



写真1-5 脇縫い代の始末

身頃のプリーツの分量や袖のギャザー、裾のレースのギャザーの分量が子供服にふさわしい分量でかわいらしく仕立てられている。

雛形の子供服の肩の縫い代の始末は、縫い代を割り端を折り返して、表身頃にステッチで縫いつけてあり、袖つけの縫い代の始末は、バイアステープで包み細かくまつってあったので、復元の子供服も同様の方法で仕上げた。写真1-4に示す。脇縫い代は、片返しにしてそのままステッチで抑えてあった。写真1-5に示す。雛形製作でも最高の技術を用いて仕立てられていることが分かった。

2-2-2 写真2の雛形子供服の復元



写真2-1 前 面



写真2-2 後 面



写真2-3 脇 面

雛形の子供服の衿周りには、幅広のレースがついていたが、衿が小さすぎるため少々無理して付けていることが感じられた。雛形通りには、付けられなかった部分である。同じようなデザインの子供服の雛形があったが、同じものがないところから察すると、デザインは、各自応用したものを製作していたと考えられた。



写真2-4 前衿のレース



写真2-5 後衿のレース

3. 子供服原型の変遷

渡邊辰五郎の遺稿で渡邊滋が編集・出版されたテキストや文部省教員検定試験 家事裁縫手芸科問題解答集等が数多くあり、その中で原型を追ってみると大きく変化していくことが理解できた。又、発行年が同じ明治42年のテキストに掲載されている原型と家事裁縫手芸科問題解答集の原型は大きく異なっていた。テキストに掲載されている作図は、作図という表現はされておらず鯨尺で着物のしるし付けと同じになっていたが、文部省教員検定試験 家事裁縫手芸科問題解答集に掲載されている原型は、記号イロハを用いて説明されており寸法は、インチを用いていた。図7に示す⁸⁾。左半身が作図されていたり、寸法にインチを用いたり、横向きに作図する方法は、渡邊滋が明治33年24歳で米国に渡り裁縫学校で1年間学び、その後引き続きヨーロッパ諸国を歴訪し、洋服裁縫教育を視察して明治35年に帰国された後、直ちに『新式洋服裁縫』の教授を始めた結果であると推測できた。

テキストは、洋服を学ぶ一般的な人にとっても受け入れやすいように、現在までの方法を大きく変えずに、鯨尺による着物のしるし付けを用いていたと考えられた。文部省教員検定試験家事裁縫手芸科問題解答集は、教育者を育成するためのものであるため、新しいものを取り入れ将来を考えての教育を行っていたと考えられた。

3-1 明治42年発行 文部省教員検定試験 家事裁縫手芸科問題解答集に掲載されている原型⁸⁾

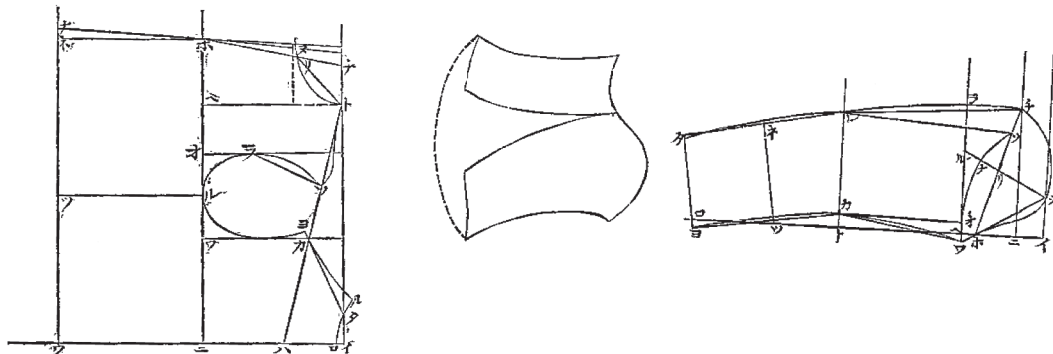


図7 明治42年 原型

図8は、図7の作図法により6, 7才女児の原型を描いたものである。用いた寸法は、ハイト：42インチ、ブレスト：24インチ、スリーブレングス：11インチ8分の1である。ブレスト寸法から割り出した寸法を用いて作図している。袖も同様の方法でありA.H曲線の寸法は、関係していない。図7の作図法にもメンズの作図の考え方が導入されていることがわかった。前肩の曲線、後肩の曲線は、図9に示すロンドン ウイリアムスンC・P・G 式のジャケット⁹⁾の肩線の形状に良く似ている。又、袖においても、図10に示す1785年頃のメンズーフコート¹⁰⁾の袖の作図に似ており、メンズのジャケットの2枚袖が基本となっている事がわかる。

本学の博物館に所蔵されている明治時代の水着の復元⁴⁾を行った時に、教科書に掲載されている作図は、バランスの悪い図になっており、本文の解説通りに作図を行った結果、当時の作図法は、必ずしも縮図の正確さは、重要視されていなかったことが分かった。作図は、2本の縫いあわされる曲線が形状も長さも大きく異なって描かれていたり、寸法のバランスも悪く、対称性についても左右対称ではなく不正確な図が描かれていたので、本報においては、原型の描き方についてテキストの解説通りに作図を行ってみた。細かな指示がありどの原型においても正確に描かれていたことが分かった。

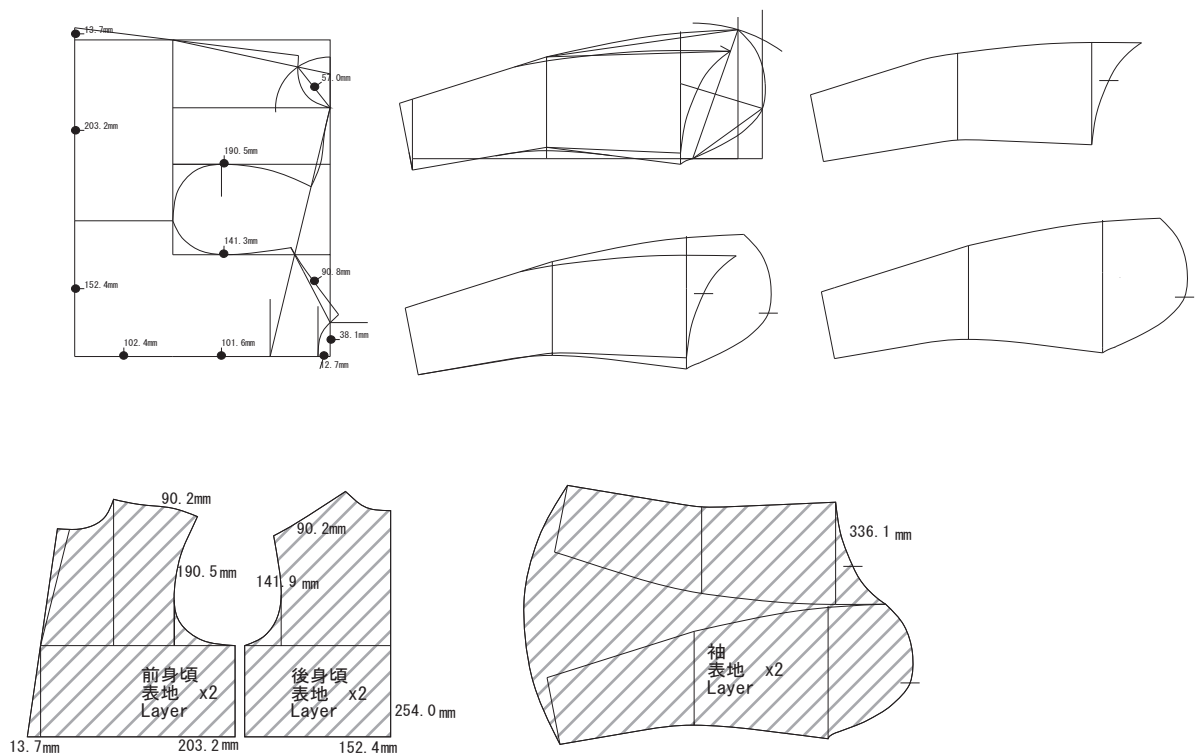


図8 図7の作図法により描いた6, 7才女児の原型

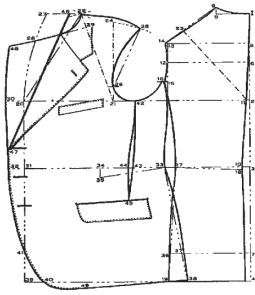


図9 ロンドン ウィリアムスンC・P・G 式のジャケット⁹⁾

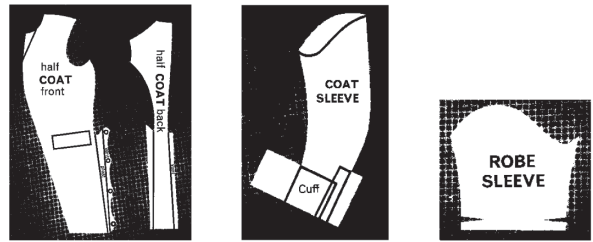


図10 1785年頃のメンズハーフコートの作図の一部分¹⁰⁾

3-2 大正14年発行 渡辺滋編集の中等教育新裁縫教科書 後編に掲載されていた、子ども用5歳児の原型¹¹⁾

図11は、大正14年に発行された渡辺滋編集の中等教育新裁縫教科書 後編に掲載されていた、子ども用5歳児の原型であり、図12は、図11の作図法により描いた5才女兒の原型である。

このウェスト原型は、1歳から成人女性までの上衣に用いるものであり、作図は割り出し寸法によらず定められた寸法を用いている。作図の線は、すべて出来上がり線である。寸法はcmを用いている。

『胸囲寸法の余裕は、各年齢を通じて8cmを加える。故に幼児ほど胸囲に比較して多くの余裕が加わるが、これは、発育を想像して多く取るのである』としている。又、前下がりが描かれるようになった。これは、『背より胸部腹部の突出しているために取る』と記載されていた¹¹⁾。

袖の作図においては、袖山の求め方に胸囲寸法が、袖幅の求め方にA.H/2寸法が基準に考えられるようになり、袖山曲線とA.H曲線の関係にいせこみ分が加わるようになった。

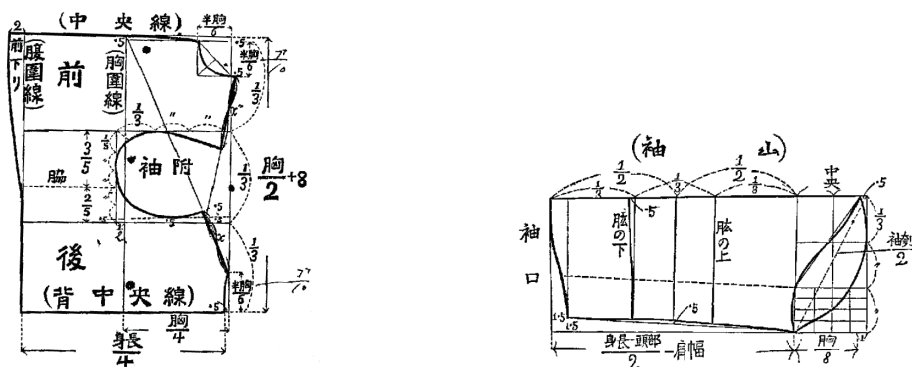


図11 大正14年 子ども用5歳児の原型

子供服洋装化の導入と改良服に求められた機能性との関係

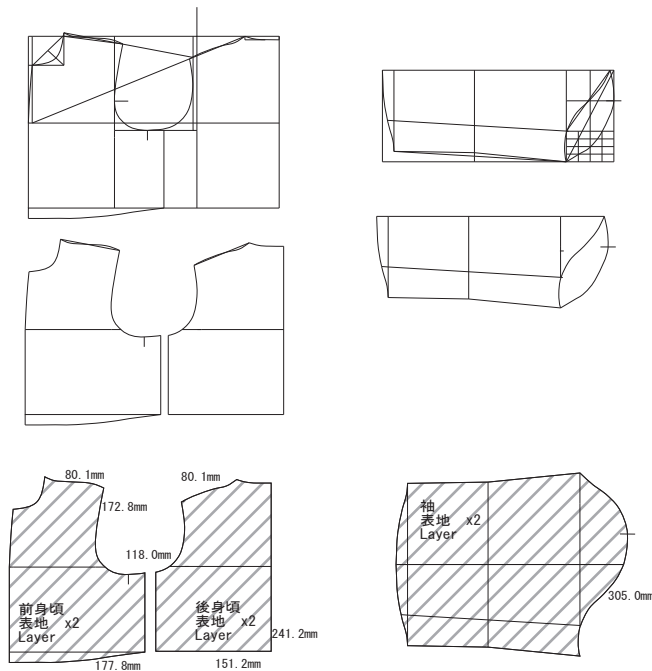


図12 図11の作図法により描いた5才女児の原型

大正10年当時用いられていた寸法を表1に示す。子供服の出来上がり普通寸法である。ウェスト原型は、1歳から成人女性までの上衣に対応できるものである。作図をするための胸グセ、後衿グリ、後肩補い、前肩上り、前下がりが年齢によって細かく定められている。成人まで対応できることは、日本でも洋服が一般的になってきていたと考えられた。

表1 大正10年 子供服普通寸法概定表 (単位：cm)

袖幅	衿肩明き	衿繰り(前)	衿繰り(後)	脇繰り丈	股下	膝丈	下袖丈	上袖丈	肩幅	胸幅	背幅	背丈	胴回り	胸周り	丈	首周り	頭回り		
17.4	4.2	4.2	1.0	13.3	18.9	12.5	13.6	22.0	17.0	16.3	17.0	20.8	45.5	48.5	30.3	20.8	41.7	1歳	
18.2	4.4	4.4	1.0	13.6	21.6	14.0	14.8	23.9	18.6	17.0	17.8	22.0	49.2	51.1	32.2	22.7	43.6	2歳	
19.3	4.7	4.5	1.0	14.0	24.6	15.5	16.3	25.8	20.1	17.8	18.6	22.7	53.0	53.8	34.1	23.9	44.7	3歳	
20.1	4.9	4.5	1.0	14.4	28.4	17.0	17.8	28.0	21.6	18.6	19.7	23.9	54.9	56.4	37.9	25.4	45.5	4歳	
20.8	4.9	4.7	1.0	15.2	32.2	18.9	19.3	30.3	22.3	19.7	20.5	25.8	56.8	59.1	39.0	26.5	46.6	5歳	
22.0	5.3	4.9	1.0	15.9	36.0	20.8	21.2	32.6	23.5	20.5	21.6	26.5	58.7	61.7	39.8	27.3	48.2	6歳	
22.7	5.7	5.3	1.0	16.3	39.8	22.7	23.1	34.8	24.6	21.6	22.3	27.7	62.5	64.4	41.7	28.0	49.2	7歳	
23.5	5.9	5.5	1.0	16.7	43.6	24.6	25.0	37.1	25.4	22.3	23.5	28.4	65.2	67.1	42.8	28.8	50.0	8歳	
24.2	6.1	5.7	1.0	17.0	47.4	25.8	26.1	39.0	26.1	23.5	24.2	29.5	67.4	69.7	43.6	29.5	51.1	9歳	
25.0	6.3	6.1	1.0	17.4	51.1	26.5	27.3	40.9	26.9	24.2	25.0	30.3	70.1	72.0	45.5	30.3	52.2	10歳	
25.8	6.8	6.4	1.0	18.2	54.9	31.1	29.2	43.6	28.4	25.8	26.5	34.8	72.0	74.7	53.0	31.8	53.8	12.3歳	
26.5	7.2	6.8	1.0	18.9	60.6	34.1	29.9	45.5	29.2	26.5	27.3	38.3	73.9	77.7	58.7	33.3	54.9	14.5歳	
	前下がりがみ	前肩上がりがみ	後肩補い	後衿グリ	胸グセ														
	1.5	0.5	0.5	0.5	0.5														1歳～3歳
	2.0	0.5	0.5	0.5	0.5～1.0														4歳～8歳
	2.5	1.0	1.0	1.0	1.5														9歳～14歳
	3.0～4.0	1.5	1.3	1.0	2.0														成人

3-3 昭和4年発行 渡辺滋編集の専門教育 児童洋服全書 後編に掲載されていた原型¹²⁾

図13は、昭和4年に発行された渡辺滋編集の専門教育 児童洋服全書 後編に掲載されていた、割り出し法による作図であり、図14は、図13の作図法により描いた5才女児の原型である。

このウェスト原型も、1歳から成人女性までの上衣に用いるものである。作図は、割り出し法による作図法であり、身長と胸囲寸法から割り出している胸度式作図法である。

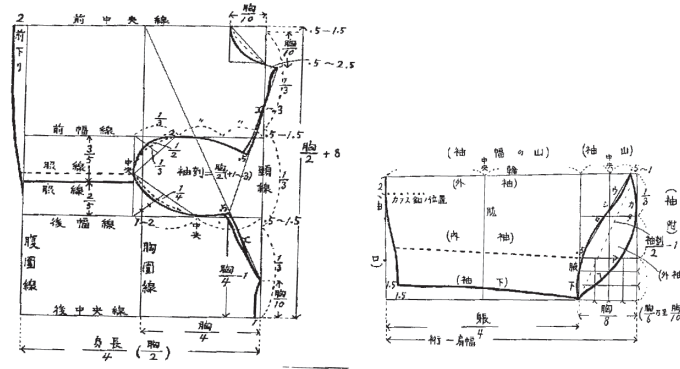


図13 昭和4年 割り出し法による原型

大正14年の原型と変わる個所は、前中心線の考え方であり垂直線で描かれるようになった。

袖の作図においては、袖山の求め方に胸囲寸法が、袖幅の求め方にA.H/2寸法が用いられていることは、大正14年の原型と変わらない。

他に採寸法による作図もある。計測箇所は、背丈、胸囲、肩幅、首廻り、肩下がり、袖付け廻り、胸幅、前丈、脇丈等であり各体型に合わせて作図する方法である。

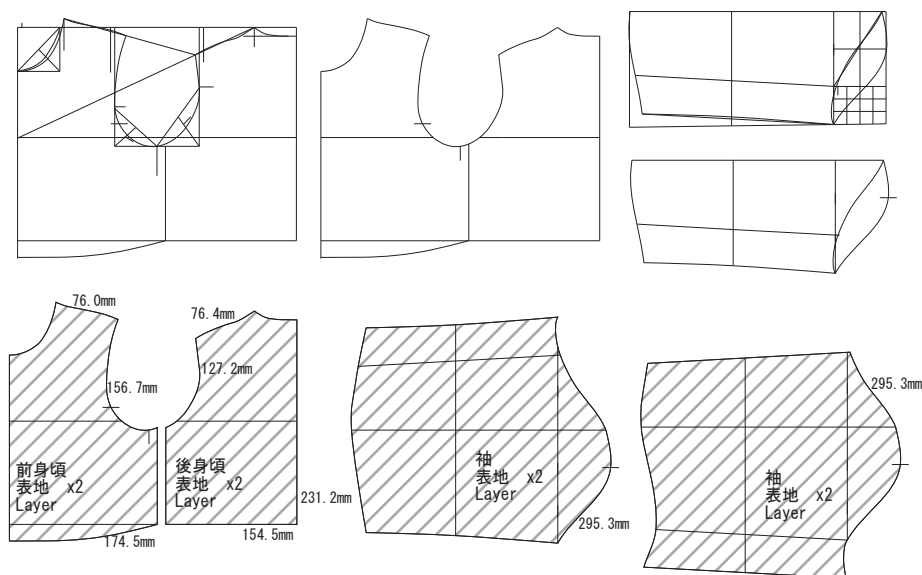


図14 図13の作図法により描いた5才女児の原型

渡邊辰五郎と渡邊滋は、メンズの勉強をされたことが理解できたが、それをレディースや子供服に応用したことは、とても大変なことだったと推測できた。教授法を考え女性の自主・自律を促した教育を行ったことは、画期的なことであった。又、裁縫という技術を通して行われたことが、日本の女性の地位を向上させ、日本の国の発展に寄与したことにつながると考えられた。

3-4 昭和6年発行 婦人子供精義 牛込ちゑ著 代表、渡辺滋に掲載されていた子供服の原型¹³⁾

図15は、昭和6年発行の婦人子供精義 牛込ちゑ著 代表、渡辺滋に掲載されていた子供服の原型であり、図16は、図15の作図法により描いた5才女兒の原型である。

現在使用されている女兒服の原型に最も近いものである。打ち合わせが逆になり右半身の作図となっている。脇線は、幅の中央となっている。背幅、胸幅は、同寸であり、前下がりも十分考えられている。

袖においては、袖山の高さ、袖幅を求めるのにA.H曲線が基準になっており、いせこみ分が考えられている作図となっている。袖山の高さは、 $A.H/4 + 2.5\text{cm}$ で求め、袖幅は $A.H/2 + 0.7\text{cm}$ で求めているため、袖下の縫い合わせ線は、図14までの袖原型と大きく異なる。

昭和4年に発表された渡邊滋の原型と昭和6年に発表された牛込ちゑによる原型に大きな違いが見られた。牛込ちゑがテキストを編集するに当たり参考にした参考書は、12冊ありすべてアメリカで編集されたものであった。

牛込ちゑが発表した原型は、どのような経緯を経て発表されたのか調べてみた。

牛込ちゑは、明治19年に誕生され、明治38年に東京裁縫女学校に入学されているので辰五郎のもとで2年間勉強したことになる。卒業後大正年間、広島県福山市の県立高等女学校で教鞭をとり、退職して現在の東京家政大学に戻って間もなくアメリカへの留学を進められ、昭和3年から4年にかけてアメリカ シアトルに留学していたということである。この原型は、その間に勉強してきた結果であると推測できた。本学の博物館に牛込ちゑ寄贈の本が2冊ある。牛込の捺印のあるものがあり、貴重な本として学んでいた様子がうかがえた。斬新なテキストであり、現在でも十分に使用できるものと感じた。1冊は、THOMAS W.HODGKINSON 著の The Director System FOR CUTTING LADIES' GARMENTS 1923年ロンドンにおいて執筆された本である。あとの1冊は、MABEL D.ERWIN 著による PRACTICAL DRESS DESIGN A Laboratory Manual in Fitting and Free-Hand Pattern Making 1933である。これらの洋書から牛込ちゑは、レディースのパターンについて勉強されたことがわかった。

また、EVERGREEN No.37の湯島時代の思い出 大江チエ・談 の中に『洋裁は、尾中先生に米国のマッコールというスタイルブックを見せて頂き、ボディを使ってフレアーのあるワンピースドレスやオーバーコートを縫いました』と記載されていた。昭和11年の頃と思われる。

MCCALL'S Magazineというのは、型紙メーカーであるマッコール社の月刊誌である。前身は、1873年から発行されている The Queen: Illustrating MCCALL'S Bazar Glove-Fitting Patterns である。牛込ちゑがアメリカでマッコールパターンも勉強し、導入したことは、十分に考えられること

と推測できた。半込ちゑと尾中明代は同時代に教員として仕事をされており、昭和33年には、共著で『洋裁精義 子供服篇』のテキストを発刊している。

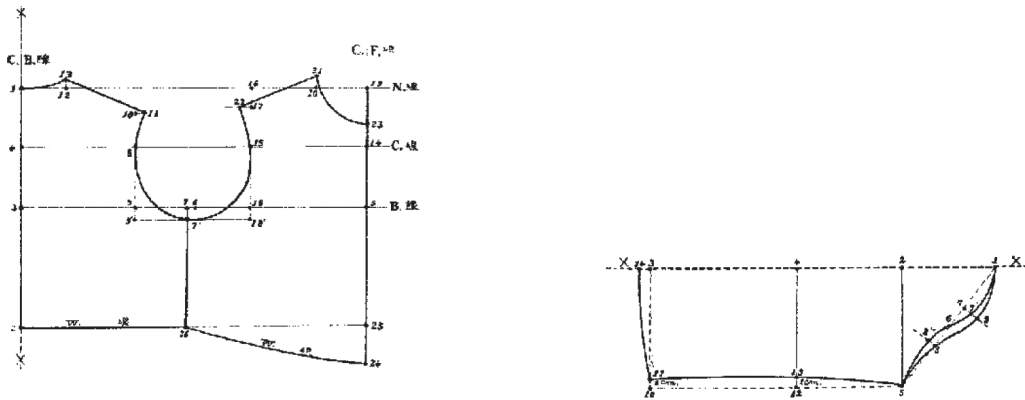


図15 昭和6年 子供服の原型

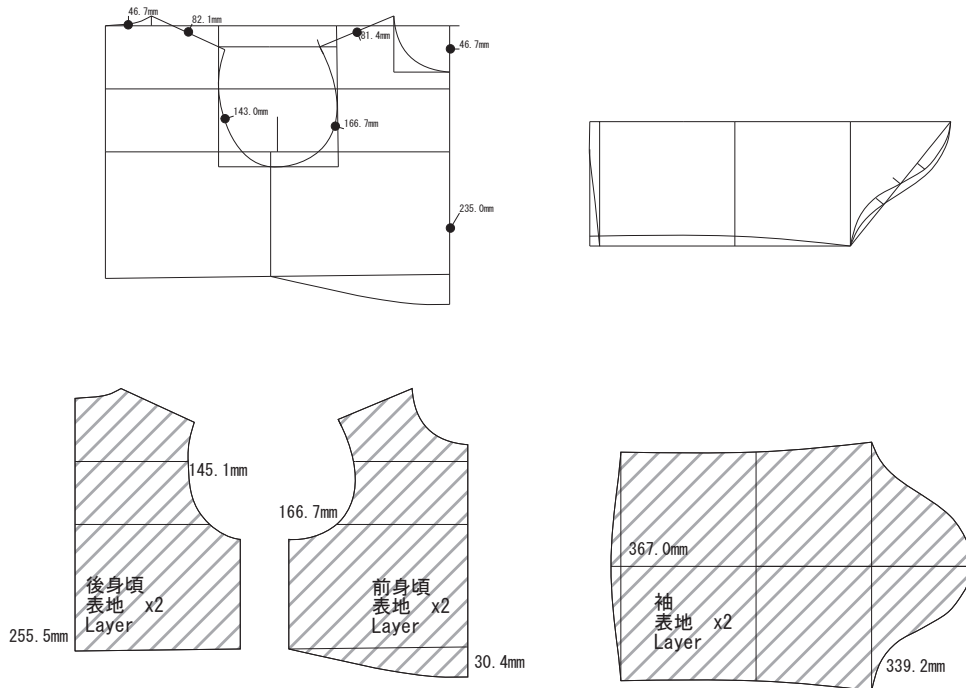


図16 図15の作図法により描いた5才女児の原型

表2 子供標準寸法¹⁰⁾

(単位cm)

男 児					女 児					
頭回り	指極	下肢長	胸囲	身長	頭回り	指極	下肢長	胸囲	身長	
33.8	46.6	19.0	32.4	49.1	33.3	46.3	18.8	32.3	48.7	初生児
45.4	71.1	32.5	45.7	73.5	44.1	70.0	31.6	44.4	72.9	1歳
46.7	77.3	35.9	46.8	79.5	45.8	76.4	35.1	46.2	78.9	2歳
47.6	83.6	39.2	48.1	85.4	46.9	82.7	38.5	47.2	84.9	3歳
48.9	89.5	43.0	49.5	91.7	47.8	88.2	42.2	48.6	91.0	4歳
49.3	94.3	46.5	50.5	97.4	48.7	93.4	45.8	49.8	96.5	5歳
50.2	98.9	50.4	52.7	102.8	49.7	98.6	50.2	51.9	102.4	6歳
50.6	105.0	53.4	54.1	108.3	49.9	103.3	52.5	53.0	107.2	7歳
50.9	109.0	56.3	55.5	113.8	50.2	107.4	54.9	54.0	112.0	8歳
51.2	114.2	58.6	57.2	118.3	50.5	112.5	57.9	56.1	116.2	9歳
51.5	119.2	60.8	59.2	122.8	51.3	118.1	60.0	58.0	120.4	10歳
51.9	123.7	62.9	61.4	127.0	51.7	123.2	62.3	60.2	125.9	11歳
52.1	127.9	64.9	63.1	130.8	52.2	128.3	65.6	62.5	132.3	12歳
52.5	133.3	67.1	64.9	135.2	52.8	134.5	68.6	65.0	139.0	13歳
53.0	138.6	70.3	66.9	141.5	53.4	140.2	70.9	67.7	143.2	14歳
53.6	144.7	72.7	69.1	146.3	53.7	141.7	71.7	71.9	144.7	15歳

表2は、昭和5年に計測された、男女の各年齢における標準寸法のデータである。

これらは、裸体寸法である。胸囲には、下着の分として、夏は3cm、冬は6cm位加えて製図をすることと記載されていた。このほかに、身体各部の発育表（三島氏調査）¹¹⁾も記載されていた。子供の採寸データが示されるようになり、子供服が製作しやすく、一般的になってきたと考えられた。

3-5 現在使用されている一般的な子供服原型（5歳児）¹⁴⁾

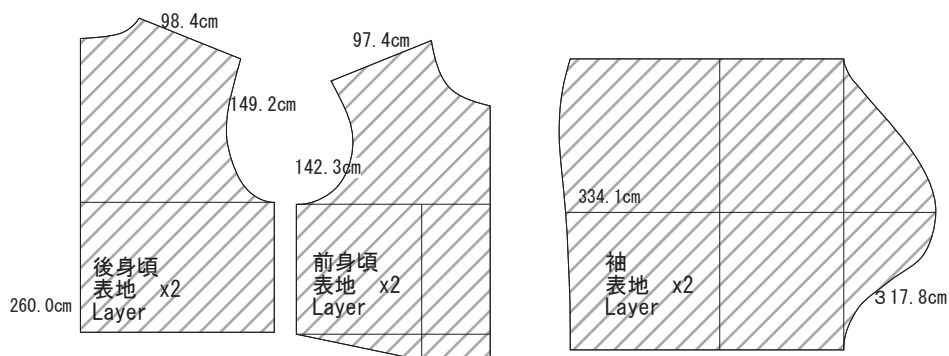


図17 現在使用されている一般的な子供服原型（5歳児）

図17は、バストと背丈の寸法を基準にして割り出した胸度式作図による原型である。バスト寸法を基準として割り出したものは、上半身各部の適合度が高いので、この方法がとられている。脇線は、身幅の中央になっており、腕の運動に対する機能面を考慮して背幅は、胸幅より広くしてある。

袖原型は、腕の部分の原型をゆるみ分、いせ分を考慮した1枚袖である。袖山の高さは、1歳から5歳までは、 $AH/4 + 1\text{cm}$ で求め、 $AH/4$ に加える寸法は、成長に従い多く加える。機能性を必要とするためである。

袖幅は、前は、前 $A.H + 0.5\text{cm}$ で求め、後ろは、後ろ $A.H + 1\text{cm}$ で求めている。

表3は、現在使用されている乳幼児のサイズ表である。乳幼児とは、身長が104cm以下の男女児をいう。

この企画は、工業標準化法に基づいて、日本工業標準調査会の審議を経て、通商産業大臣が改正した日本工業規格である。

表3 乳幼児用衣料のサイズ JIS L 4001-1998 (単位cm)

呼び方		50	60	70	80	90	100
基本身体 寸法	身長	50	60	70	80	90	100
	体重 (kg)	3	6	9	11	13	16
参 考	身長	49.5*	60	70	80	90	100
	体重 (kg)	3.2	6.4	8.6	10.9	13.1	16.1
	また(股)の高さ	-	-	23.8	29.6	35.4	40.9
	足長	-	8.8	10.6	12.8	14.5	16.0
	頭囲	33.4*	40.5	44.7	47.5	48.7	50.0
	バスト ⁽¹⁾	32.5*	41.7	45.6	48.7	50.7	53.6
	腹囲	-	39.8	42.0	45.4	47.2	50.2
	ヒップ	-	41.1	44.2	46.9	50.1	54.5
	胴縦囲	-	66.8	74.5	80.7	86.7	93.7
	首つけ根囲	-	23.4	24.0	24.1	25.1	26.6
	上腕最大囲	-	14.2	15.0	15.3	15.9	16.9
	手くび囲	-	10.4	11.0	11.0	11.3	11.9
	掌囲	-	9.9	11.0	11.6	12.3	13.3
	大たい(腿)最大囲	-	25.2	26.2	27.2	29.7	32.5
	下たい(腿)最大囲	-	16.3	18.0	19.3	20.4	22.3
	総丈	-	-	55.9	64.0	72.3	80.9
腕の長さ	-	17.7	21.0	24.9	28.0	31.3	
背肩幅	-	17.2	19.5	21.8	24.2	26.6	

注(1)のバスト位は男子もバスト位で計測した。

参考欄は、昭和55年度に実施した“既製衣料の寸法基準作成のための日本人の体格調査研究”の解析結果によった。ただし、*の数値は、厚生省の調査結果に基づき算出したものである。

新生児から高齢者まで体に合った衣服を創るためには、男女別に年齢層別の体型に応じた体型区分を行い、各区分内で個体差に対応できるような体型分類を行うことが大切になっている。ISO(国際標準化機構)では、着用者を乳幼児(男女児一括)、少年、少女、成人男子、成人女子の5つのグループに区分して、それぞれにサイズを設定するよう規格化している。

4. 考 察

明治38年と41年に製作された雛形の子供服のワンピースの復元を行ったが、作図の掲載されているテキストはなく、『渡邊辰五郎先生遺稿 渡邊裁縫講義高等部』に掲載されていたワンピースの作図⁴⁾を参考にした。明治38年に使用されていたテキストは、子供洋服が掲載されていない『洋裁教科書』であったので、教科書以外での授業方法には、開発等苦勞があったと思われる。子供服の製作方法が本格的に紹介されるのは、明治40年代になってからのことである。復元した2種のワンピースのしるしの付け方は、和服の要素が強いものであったが、出来上がったワンピースは、形や色使いがすっきりと洗練された、かわいい、機能性のある洋服の要素が沢山入ったものであった。明治時代の後半になると子供服には、衿や肩、ヨークの周りにフリルやレースをあしらったものが多く、この時代の特徴であった。

子供洋服で最も古い雛形は、明治30年に製作されたもので本学の博物館に所蔵されているが、明治27年頃に採用された看護婦服に形状が似ていたり、箱襷が袴を連想させるものであったり、又、バツル・スタイルのように後ろのボリュームを意識したものがあつたりと時代ごとの変化が表れている。

1910年（明治43年）のことであるが、洋裁製図式がアメリカから初めて導入され、日本では、バス車掌に制服が着用された。欧米においても1910年という年は、スタイル混合時代を迎えた年である。フランスにおいては、日本の明治時代は、新ロココ時代にあたる。クリノリンからバツル衣装へ移行、その後もSカーブシルエット等が流行し、1910年に入るとスタイル混合時代を迎え婦人服の流行が、コルセットを用いない直線的なシルエットに変化した。大正時代の雛形の子供服にも、それまでとは異なるシルエットがみられる。このように時代による流行や風俗の形成が、現在の衣生活の原型となっていると考えられた。

日本において洋服が最初に大量生産されたのは、江戸幕府の軍服だった。明治維新を経て1871年に陸軍や官僚を西洋風に改めることを定めた天皇の勅諭が発せられた以後、警察や鉄道員、教員等が順次服装を西洋化することになった。しかし庶民の生活の中に一般化するまでには、時間がかかった。1923年（大正12年）に起こった関東大震災では、和服を着用していた女性の被害が多かったことから女性の服装の見直しが進むことになった。さらに、1924年（大正13年）には、『東京婦人子供服組合』が発足し、その結果女性の服装にも西洋化が進むことになった。1927年（昭和2年）9月には、銀座三越において、日本では国内初のファッションショーが開催されている。これは、現在のようなファッションデザイナーによるファッションショーではなく、一般からデザインを募ったファッションショーであった。この頃より日本において一般大衆の服装の洋装化も徐々に広まっていったと考えられた。しかし、世界第二次大戦（1939年から1945年）が勃発し、この間の日本は、全体が戦争で一色になった時代であった。物不足が洋服の普及に大打撃を与えたのである。

このような災害の影響もあり、婦人・子供服の洋装化が一般化されたのは、戦後の復興期といえる。

時代が激動する中においても、子供の洋装化については、より良い衣服の模索が行われていたこと、そして試行錯誤の中で製作、着用の面では機能性等日本人に合う洋服の研究をしていたことを実感した。

衣服原型の変遷の中からも、実感することができた。

5. まとめ

日本における洋装のはじまりは、やはり外国の子供服の模倣からスタートしたと考えられる。

雛形の子供服のデザインは、外国のファッション誌から取り入れているものが多くみられた。子供が洋服を着るようになるのは、明治も後半になってからとされているが、上流階級の子供たちは、舶来品を模して日本人裁縫師が仕立てた洋服を着用していた。庶民の子供は着物の上にレースやフリルのついた西洋前掛けを身に着けることが流行した¹⁵⁾。このような形で洋服が子供服に導入されてから一般庶民に着用されるまでになるのに長い年月がかかっている。渡邊辰五郎が、改良運動を始めた時から65年がたつことになる。女子教育を通して日本の衣生活の原型を作ったことになり、又それが日本の国を変えたことになると考えられた。渡邊辰五郎が教育家として使命を果たされたことの評価は高い。

最近では、消費者の子供服の買い方が、『必要だから買う』から『楽しいから買う』に移行しつつある。消費者の買い方が目的買いからコト消費に変化してきている。

このような中で、子供が着用している服装から起こる事故が多発しており、安全面に対して注目が集まっている。社会的にも大きな問題となっている。

今年3月には、4歳の女兒が自宅から外に出る際、上着のフード部分が玄関の取っ手に引っかかったまま扉が閉まり首が絞まった状態となる事故が起きた。命に別状はなかったが目の周りからうっ血し、首回りも皮下出血し入院した事故が起きた。その他にも子供服による事故は、相次いでいる。前で結んだパーカーの紐が、他人のカバンの金具に引っかかって引っ張られ首が絞まった例や、滑り台に引っかかって起きた事故、ズボンの裾の長さを調節する紐が電車の扉に挟まったことによる転倒、ファスナーによる擦り傷等数多くある。

子供は、未成熟であり、限られた力しか持っていない。子供が力強く生きていける一個人の人格にまで成長するように大人が見守り手助けしてあげることが必要であり、また大人の責任でもあると考える。今後は、子供用衣服に求められる安全性について検討していく。

この論文は、生活科学研究所総合研究プロジェクトにより行った研究の一部である。

参考文献

- 1) 山田民子, 寺田恭子, 富澤亜里沙, 澤野文香: 東京家政大学博物館紀要, 18, 東京, 東京家政大学博物館, 2013, p.71～92.
- 2) トク・ベルツ編 菅原竜太郎訳: ベルツの日記, 東京, 岩波書店, 1979, 上, p.241.
- 3) 重要有形民俗文化財「渡辺学園裁縫雛形コレクション・上巻 解説・目録編: 東京, 東京家政大学博物館, 2001, p.9.
- 4) 渡邊滋: 渡邊辰五郎先生遺稿 渡邊裁縫講義高等部, 東京, 東京裁縫女学校, 1911, p.94～95, p.354～p.365, p.366～367.
- 5) 三友晶子, 太田八重美(編集): 重要有形民俗文化財指定10周年記念 渡辺学園裁縫雛形コレクション: 東京, 東京家政大学博物館, 2010, p.17.
- 6) Nancy Villa Bryk: AMERICAN DRESS PATTERN CATALOGS, 1873-1909, 米国, DOVER PUBLICATIONS, 2011, p.146.
- 7) 渡邊滋: 渡邊辰五郎先生遺稿 新裁縫教科書 巻3, 東京, 東京裁縫女学校, 1909, p.169～p.178.
- 8) 渡邊滋: 文部省教員検定試験 家事裁縫手芸科問題解答集, 東京, 東京裁縫女学校, 1910, p.62～66.
- 9) 木村慶市: 裁断研究, 東京 ストック商会, 1925, p.160.
- 10) The Evolution of Fashion: Pattern and Cut from 1066 to 1930, 米国, Reinhold Publishing Corporation New York.
- 11) 渡邊滋: 渡邊辰五郎先生遺稿 中等教育 新裁縫教科書 後編, 東京, 東京裁縫女学校, 1925, p.107～219.
- 12) 渡邊滋: 渡邊辰五郎先生遺稿 専門教育 児童洋服全書 後編, 東京, 渡辺女学校, 1929, p.16～30, p.60～p.62.
- 13) 牛込ちゑ: 婦人子供服精義 裁縫全書専門教育, 東京, 渡辺女学校, 1928, p.103～105.
- 14) 文化ファッション講座: 子供服, 東京, 文化出版局, 1990, p.30～32.
- 15) 三友晶子: 東京家政大学博物館紀要, 14, 東京, 東京家政大学博物館, 2009, p.167～185.

